

狸

三井喬子

狸は、あやしい生き物である。そうではあるけれど、あまりに身近な生き物であり、顔も馬鹿けているから、あやしいといっても、かなり笑いの対象である。

清水さんは、東京のご真ん中（と思われる）その狸の群れに遭遇なさったそうだ。えっ？ 東京で？ 出会った？

わたしは、五十年〜六十年前、愛知県豊橋市にあった実家で二回遭遇したことがある。はじめての時は狸とは知らなかった。お祖母ちゃんから、それは狸だよと教わったのである。隣接する土蔵の縁の下に棲んでいたとのこと。網戸なんてなかった時代、廊下から侵入したのだろう。

ある夕方、何か言いつけられて奥座敷に入った。ふっと空気が揺れて…、何気なく床の間をみたら、置物がぐらっと傾いたのである。身構える間もない位素早くわたしを襲った、ということは無論なく、そ奴は足元をすりぬけて行った。それが化け物と言われる狸との遭遇の最初である。何かひどく臭かったことを覚えて、いや現在では「臭かった」という言葉だけで記憶している。

二回目はその十年後くらい。廃屋となっていた薪部屋の奥に狸がいたと新家の叔父さんや大工の金蔵さんが騒ぎだし、捕まえて狸汗にしようとだれもが思い、輪になつて囲い込んだ。やいのやいのと騒いだが、そ奴も人間の鎖（！）を破って遁走した。わたしだって、狸汗を思つて、ほんとうに残念に思つたのだった。結局、今に至っても、狸汗の味を知らないままである。

ここ十年くらいは金沢の家の庭に出る。姿は見えないのだが、一坪の大事な大事な畑を荒らし、チューリップや水仙や百合の球を食べ、臭い糞を残して行く。まあ、百合に至っては、おせち用に用意したものの余り物、つまり人間の残したものを消費しただけなのではあるが。

夫は、散歩の途中目の前に出て来た奴にびっくりしたそうだが、奴もびっくり

したらしく素早く草むらに逃げ込んだそうである。少ないとはいえ、車の途絶えることはない道路沿いである。捕まえてくれば良いのにと一瞬思ったが、これは言うほうが無理というものだろう。熊でなくて良かったと言っべきだ。

限界集落周辺では、時々変な知り合いに出会うことがある。狸はわたしの脳の神経細胞のどこかを刺激して、変な文章を書かせる。時には行を分けたりする。わたしは、本当は化け狸で、読者を誑かしているのかも知れない。

灰皿町西海岸1番地（三井喬子）